
2人は河原の傍で

によきりん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

2人は河原の傍で

【Nコード】

N9983T

【作者名】

よきりん

【あらすじ】

妹子がもらったのは河原に來いといういつになく真面目な太子の手紙。河原で何をするのだろうか？……

（前書き）

えつと超過激妄想です

いろいろ変ですが温かい目で見逃して下さい（＾－＾）；

『郵便でーす!ー!』

その声に小野妹子は起き上がった。

「あ、お疲れです。いつもありがとうございます」

走り去る姿を見送りながら手紙を開けてみた。

差出人は……

「ほげ」

アホの太子からだった。

妹子の思い出 に太子のおかしな手紙が浮かび上がる。

まあしょうがない、読んでやるか、と封筒を開けて手紙を読んだ。

妹子へ

早く河原へ来い

P・S・来なかったら聖徳サブレ

聖徳太子

妹子は少しおかしい、何か違うとすぐに感じる。

それは手紙の内容がいつもと違うからだ。

むかつくような手紙ではなかった。もっとも聖徳サブレというのは変だが。

そして 妹子の思い出 に最近の太子が浮かび上がる。

このところ元気が全くない。仕事をしないのは日常茶飯事だがサボりすらもやってない。ただ仕事場にきてそのままぼーっとする。それだけだ。

しょうがない、いつてやるか。

妹子はそういう思いから立ち上がって準備を始める

妹子が走ってやっと着いたとき、太子はというと河原につまらなそうに寝そべっていた。

太子の顔には「ストレス」みたいな表情が浮かんでいる。とりあえず妹子は声をかける。

「ああ妹子、よく来たな。待ってたぞ」

太子は元気ゼロの声でつぶやく。

妹子も答えた。

「そうですか」

「……………」

「……………」 双方無言の40秒が過ぎる。

やがて話し出したのは妹子だ。

「それで、何の用ですか？」

太子の顔に一瞬戸惑いが見えた（ような気がした）がやがてこう
いった。

「妹子は私の過去は知ってたっけ？」

「は？知りませんよ」

そうか……。太子はつぶやくと語りだした……………。

*私は摂政に推薦されたからなっただが、「そもそもなんでこんなバカが摂政に？」って妹子は思わないか？

実はな……………

私は馬鹿を演じているだけなんだ。

最初は誰だっけと疑うと思うが、まあ聞いてくれ。

生まれたときから結構勉強——いや、学問といったほうがいいか？

——ができたんだよ。

私の小さい頃の噂はだいたいのことは本当のこと。*

「では1つ質問。学問のできる子供をみたら親や周りの人はどう
いう反応をするか？」

一方的に語っていた太子がここで質問してきた。

妹子はしばらくして答える。

「褒めるかさらに勉強させる、ですか？」「正解」

太子は笑って答えたがその笑顔は泣いているような感じがした。

* 妹子のいった言葉がまあ正解だな。

もつと天才にしたかったのだろっ。勉強生活が始まったんだよ。

でも

でも

でも

その分私がいろんなことを楽しむはずの時間がその時終わった。
朝起きて勉強、

御飯を食べたら勉強、
他の子と遊ぶことも、
やりたいことをするのも、
禁止された。

辛い。辛かった。

大人になるまで続いた。

私が摂政に選ばれたときにはもう、心が壊れかけていた。
自分に自由を与えたかったんだ。

だから仕事もしない、服はジャージ、わがままなこともあった。
それが結局みんなに迷惑かけたんだろうな。*

「ええ、ああ」

― 厳しい過去だったんだろうな。嘘か本当かどうかとして。

妹子は2つ気になったことがある。

「そこに僕に関することが入ってないような……」

「妹子と初めて会ったとき、なんか普通の人じゃないと私は感じたな」

そうか、僕は普通には見られてなかったのか……妹子は少し変に思った。

「そして私の予想は当たった。妹子という楽しかったさ。痛い」と

きもあつたがな」

そう話している太子は本当の笑顔を見せていた。

妹子はもう1つの疑問も聞く。

「で、なぜそれを今になつて？」

「あ、なんていうかな、その……最近になつてそのことが夢に出てきたんだ」

「……悪夢、っていうやつですか？」

「そう、それ。だから眠りたくても眠れないんだよ」

「だから元気ないんですね」

妹子も納得。

「まあそういうことだ」

「へえ」

双方無言の60秒が過ぎる。

やがて話したしたのは太子だ。

「ちなみになぜ河原に呼び出したのは分かるか？」

「えっ……」

妹子は何か感じた。殺気ではないがその感情は強く、そして怖い。

「もう嫌なんだこんな人生。だから、今までありがとう。そしてさよなら」

今マデアリガトウ

ソシテ

∴
∴
∴
∴

サヨナラ？

すると太子はいきなり走りだした。

その先は川、河。

反射的に妹子は石を持ち、投げた。

見事に太子の後頭部に当たった石は草村に落ち、転がり、川に沈んだ。

「何するんですか太子！？自殺ですか！？」

「黙れ！！私なんか迷惑なバカ摂政だ！死んでも構わない！！！」
そうしてまた川に走りだす。

妹子も石を投げる。

今度は太子の足に当たる。すごいダメージだったのか走れないようだ。

妹子は精一杯、ありったけの声でいった

「本当に太子はバカですね！！！！」

太子は何も言わない。

その代わりにいつもなら絶対見せないような目で睨む。

「あんたの過去とか悪夢とかは知ったこっちゃない！だけど半分勝手に自分で思いを背負ってそれで自殺！？バカ摂政にも程がありますよ！！」

そして妹子は太子に抱き着く。

転がり転がって止まると目前には川。

妹子は絶対に離れないというようにしがみつく。

太子はただただ驚く。

「それでも嬉しいのは、僕に真実を明かしたこと、僕と一緒にいると楽しいという言葉と笑顔です」

頬を真っ赤にしながら微笑む妹子の顔には涙が溢れていた。

しばらくそのまま妹子をみつめていた太子は小さく呟く。

「……本当に大丈夫？」

その言葉に幾多の思いが詰まっているのだろう。

二人の目の前の川は緩やかに流れ、空は穏やかな夕焼けに染まっていた。

(後書き)

はじめまして！によきりんです。

普段は日和絵を描いているのですが勉強で絵を禁止され妄想に走ったのです↑えゝ

超意味不明妄想二次創作ですが気にしないで下さい。

ダイジョウブ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9983t/>

2人は河原の傍で

2011年10月9日01時28分発行